

日韓の中学校歴史教科書叙述の比較検討

— 朝鮮通信使の教科書叙述を中心に —

釜 田 聡*

(平成17年10月31日受付；平成17年11月30日受理)

要 旨

本研究の目的は、1982年の歴史教科書問題から、2005年申請本までの歴史教科書叙述の変遷を江戸時代の朝鮮通信使を中心に比較検討することで、教科書叙述の変化と課題を明らかにすることである。

朝鮮通信使の叙述に着目し日本の歴史教科書叙述の変遷と最近の日韓の歴史教科書叙述を比較検討した結果、歴史学の研究成果と日韓の歴史学・歴史教育の対話の成果が徐々に日韓双方の教科書叙述に影響を与えてきたことが分かった。そこで、朝鮮通信使から江華島事件までの歴史的経緯を生徒が統一的に把握できる教材開発が急務であることを指摘した。

KEY WORDS

On Japan-Korea Embassies in Edo period

江戸時代の通信使

History textbook

歴史教科書

Mutual Understanding between Japan and Korea

日韓の相互理解

I. 問題の所在

1. 1 日韓の歴史認識問題

1982年のいわゆる歴史教科書問題は、日本と東アジア諸国との政治外交上の問題に発展した。とりわけ韓国は、独立記念館の設立に動くなど過敏な反応を示した。

こうした政治的・外交的な摩擦を踏まえつつ、日韓の歴史学・歴史教育研究者は、歴史教科書叙述の比較研究を中心に重厚な研究成果を積み重ねてきた。

また、民間交流においては、2002年のワールドカップサッカー共催や韓流ブームなどで、これまでになく日韓の友好ムードが高まってきた。

しかし、2005年春、日本発の歴史認識問題は韓流ブームにわく日韓に暗い影を落とした。言うまでもなく、歴史認識問題とは日本の中学校歴史教科書採択にかかわる問題と、鳥根県の「竹島の日」条例の制定などの歴史問題である。

韓国・盧武鉉大統領の未来志向発言などもあり、特に日本側において「歴史問題は過去のものである。これからは未来志向で」とする論調が強くなっていただけに、2005年の日韓の歴史認識問題は日韓に横たわる歴史問題の重さを再認識させた。と同時に日本の学校教育、とりわけ歴史教育に携わる者にとって、過去の積み重ね（先行研究）を共有し、日韓の相互理解をめ

* 上越教育大学学校教育総合研究センター

ぎず歴史教育の内容と方法を提案することを求められているといえよう。

1. 2 研究の動向 - 歴史教科書叙述を中心に -

日韓の歴史教科書叙述を中心とした対話は、加藤章、李元淳の二人が大きな役割を果たした⁽¹⁾。加藤章によると、日韓歴史教育交流の実質的第一歩は、1976年8月のソウル大学教授李元淳の来日であるという⁽²⁾。

光復後（1945年8月15日）の韓国の歴史学・歴史教育は、徹底して日本の植民地史観からの脱却をめざしていた。それは、第3次教育課程（1973年8月13日中学校教育課程発表）で、社会科から国史が分離独立したことで端的に表れる。第3次教育課程で、歴史教育は「国史科」と「社会科の中の世界史」という2元的な体制に分離し、施行されることになったのである⁽³⁾。

このような状況の中で発生した1982年の歴史教科書問題は、日韓に歴史問題についての対話の必要性を再認識させるに十分な出来事であった。その後、日韓の歴史学・歴史教育研究者は歴史教科書叙述を中心に対話を始めた。その研究成果の一つとして、1987年10月に計画された上越教育大学・文部科学省海外学術研究「日本国と大韓民国の歴史教科書叙述に関する基礎的研究」がある。最近では、東京学芸大学とソウル市立大学の研究グループによる韓日共同歴史教材作成の試みなどが注目されている。

当初、日韓の歴史問題の対話の窓口は、歴史学研究者・歴史教育研究者であった。しかし、最近では、歴史教育に関心のある小中学校教員、あるいは高校教員がその対話の輪に加わるようになり、歴史授業の検討会を相互に行うまでになった。

また、谷川彰英（2005）は「教科書の叙述レベルでの検討ではおのずから限度がある。むしろ、授業という作業の中でどのような考えを引き出し、伸ばしていくのが重要である⁽⁴⁾」と教科書叙述中心の歴史教育研究に疑問を呈している。

筆者自身、日韓の教室内の歴史意識・歴史認識に着目した研究を重視していることもあり、谷川の意見には概ね賛成である。また、今後の日韓の歴史問題を打破する上で有効な手法の一つであると考ええる。

しかし、日韓の歴史教科書の対話を静的な対話の回路ととらえ、そこから動的な教室内の歴史意識・歴史認識を探ることができるとも考える。その際、歴史教科書は日韓のみならず、歴史学と歴史教育、さらには歴史教育実践者を取り結ぶインターフェイスとしての役割を果たすことになるであろう。

1. 3 朝鮮通信使とは

「通信使」は、一般的には、「朝鮮国王が書契（国書）および礼単（進物）をもって、足利将軍、徳川将軍に派遣した外交使節団。「朝鮮通信使」「朝鮮信使」「信使」「朝鮮来聘使」「来聘使」「御代替わり信使」ともよばれた」と説明されている⁽⁵⁾。

壬辰倭乱後、日朝関係はしばらく閉ざされるが、実権を握った家康は対馬藩に依頼し、日朝間の国交回復に努めた。途中、対馬藩の国書改竄があったが、1607（慶長12）年1月、回答兼刷還使の日本派遣に結び付けた⁽⁶⁾。

こうした江戸時代の「通信使」は、徳川幕府の思惑と朝鮮側の外交姿勢、そして朝鮮貿易に依存せざるを得ない対馬藩の外交交渉があって成立したものである。

国書改竄事件で幕を開けた朝鮮通信使来日の歴史には、「日光山致祭と進物」「白石の日本国

王復号」「白石の聘礼改革」「大仏殿前招宴問題」「対馬藩士（鈴木伝蔵）の通信使（崔天宗）殺害事件」など、数々の危機もあった¹⁷⁾。それぞれの危機を両国、あるいは対馬藩、当事者同士が議論を重ねたり、互いに妥協したりしながら、江戸時代の「通信使」はその歴史を刻み、副次的に文化交流の使節としての役割も果たしたといえる。

一方では、通信使と一般民衆との交流があったことも見逃せない。日本各地には、岡山県牛窓町の唐子踊り¹⁸⁾や三重県津市の唐人踊り等、通信使に縁のある芸能や書籍、絵画が残されており、通信使は両国文化交流のうえで大きな役割を果たしたことも事実である。

1. 4 本研究の意義

本研究では、江戸時代の朝鮮通信使の教科書叙述に焦点を当てる。

それは、日本の歴史教科書における朝鮮通信使の叙述の変遷を整理することで、日韓の歴史学・歴史教育研究の対話の成果と今後の日韓の教室における教育実践の手がかりが導出されると考えるからである。

2005年春、日本では、8社の中学校歴史教科書の申請本が出そろった。レイアウト面では、各社とも、2002年版に引き続き、ビジュアル化に一層拍車をかけた。

内容面に着目すると、写真や図の配列を工夫し、生徒の歴史的思考力や判断力の育成を意図している教科書が多くなってきた。

歴史教育の内容と方法が問われている今、歴史教科書叙述がどのような影響を受け、変遷してきたか、今現在の叙述はどうなっているのかについて、分析することは極めて重要なことである。とりわけ一つの歴史的事象が、他国の教科書にどのように叙述されているか、またそれはなぜなのかを考えることは、歴史学・歴史教育研究だけでなく、歴史教育実践においても、極めて意義のある営みだと考える。それは、歴史教科書叙述を形式的に日韓で統一するというのではなく、「なぜ異なっているのか。その理由は何か」などについて、日韓の教室で教師と生徒が話し合うことによって、歴史教育実践がより深まると考えるからである。なお、本研究は、釜田聡（2000）が「1980年前後の教科書叙述と現行の教科書叙述とでは、日本列島と東アジア、特に朝鮮半島とのかかわりについての叙述が増えつつあるが、通信使外交と江華島事件の関係を読み取ることが困難であった¹⁹⁾」ことを明らかにした研究成果を受けてのものである。

つまり、本研究では、日本で2005年に発行された申請本と、韓国で第7次教育課程で発行された国史教科書の朝鮮通信使の叙述に研究の焦点を当てる。そうすることで、今後の歴史教育研究と歴史教育実践の方向を見いだすことができると考える。

以上のように、日韓の中学校歴史教科書叙述を検討することで、日韓双方の歴史教育と歴史教育実践の研究の深化に寄与するとともに、新たな日韓対話の窓口を見出すことが本研究の特色といえる。

II. 研究の目的

本研究の目的は、次の2点である。

○1982年の教科書問題発生前後の歴史教科書から、2005年申請本までの教科書叙述の変遷（江戸時代の通信使）を時系列に追うことで、日韓の相互理解の視座から教科書叙述にどのよう

な変化があり、どのような課題があるかを明らかにする。

- 2005年申請本（8社）の朝鮮通信使の叙述と韓国国定教科書「国史」の朝鮮通信使の叙述を比較検討し、日韓双方でどのような異同があるかを明らかにする。

Ⅲ. 研究の方法

次の手順で研究を進める。

- (1)1971年, 1986年, 1996年, 2005年の日本の中学校歴史教科書に「朝鮮通信使」関係の用語, 図版等が掲載されているか否かを調べ, 一覧表に整理する。→【表1】
- (2)日本の歴史教科書のT社, N社, O社, K社の朝鮮通信使関係の教科書叙述の変遷を時系列で比較する。→【表2-1】～【表2-4】
- (3)日本の2005年申請本と韓国2002年版国史教科書における朝鮮通信使に関する叙述を比較検討する。→【表3-1】～【表3-3】

日本の中学校歴史教科書は, 次の8社を分析の対象とした。

東京書籍, 日本書籍(日本書籍新社), 大阪書籍, 教育出版, 清水書院, 日本文教出版, 帝国書院, 扶桑社

韓国「国史」教科書については, 国定教科書を翻訳した次の書籍の叙述を引用した。

- 石渡延男監訳『入門韓国の歴史』明石書店,1998
 国史編纂委員会・一種図書研究開発委員会編『国定韓国中学校国史教科書』韓国教育部,1996
 ○三橋広夫訳『韓国の中学校歴史教科書』明石書店,2005
 国史編纂委員会・一種図書編纂委員会編『国定韓国中学校国史教科書』教育人的資源部,2002

Ⅳ. 研究の結果と考察

4. 1 通信使関係の記述・図版等の一覧

日本の中学校教科書

1971年版, 1986年版については, 東京書籍, 日本書籍(日本書籍新社), 大阪書籍, 教育出版, 清水書院の5社を研究の対象とした。

1996年は, 日本文教出版を加えた6社を研究の対象とした。

2005年申請本については, 帝国書院と扶桑社の教科書を加えた8社とした。

【表1】 中学校歴史教科書に叙述された「朝鮮通信使」関係の用語・説明等

表中の「年代」は教科書検定の年度及び改訂年度のこと。

○印は叙述があるもの。あるいは掲載されているもの。

| 項目 | 年代及び教科書会社名 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|-----------------|---|---|---|---|-----------------|---|---|---|---|----------------|---|---|---|---|--------------------|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 昭和46年 (1971) | | | | | 昭和61年 (1986) | | | | | 平成8年 (1996) | | | | | 平成17年申請本 (2005) | | | | | | | | |
| | T | N | O | K | S | T | N | O | K | S | T | N | O | K | S | B | T | N | O | K | S | B | t | F |
| 朝鮮との国交回復 | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 慶賀の使節(代がわり) | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ |
| 朝鮮通信使 | | | | | | ○ | ○ | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 対馬藩 | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 宗氏 | | | | | | | | | | ○ | | | ○ | | ○ | ○ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 雨森芳洲 | | | | | | | | | | | ○ | | | | ○ | | | | | | ○ | | ○ | |
| 唐子踊り, 唐人踊り | | | | | | | | ○ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | | | ○ | ○ | | ○ | |
| 通信使関係の絵図等 | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ |

4. 2 通信使関係の教科書叙述の変遷一覧

ここでは、東京書籍、日本書籍（日本書籍新社）、大阪書籍、教育出版の4社を対象とする。
 なお、調査は1971年版から2002年版までの教科書と2005年申請本を対象とした。

【表2-1】 【T社】

| 年 度 | 朝鮮通信使に関する叙述等 |
|-----------------|---|
| 昭和46年 (1971) | ○朝鮮とは、家康のときに国交を回復してから、将軍がかかわるごとに慶賀の使節が来る慣例となった。 |
| 昭和55年 (1980) | ○朝鮮とは、家康のときに国交を回復してから、将軍がかかわるごとに慶賀の使節が来る慣例となった。 |
| 昭和61年 (1986) | ○朝鮮とは、家康のときに国交を回復してから、将軍がかかわるごとに慶賀の使節が来る慣例となった。 ○「朝鮮通信使の一行」をあらわす絵（朝鮮人來朝図） |
| 平成元年 (1989) | ○朝鮮とは、家康のときに国交を回復してから、将軍がかかわるごとに慶賀の使節が来る慣例となった。 ○「朝鮮通信使の一行」をあらわす絵（朝鮮人來朝図） |
| 平成4年 (1992) | ○朝鮮とは、家康のときに国交を回復してから、将軍がかかわるごとに慶賀の使節（通信使）が来る慣例となった。 その連絡に当たった対馬藩は、貿易を行うことも許され、朝鮮の産物や、中国の絹などを輸入した。 ○雨森芳洲など、対馬藩の学者は、外交のため、朝鮮の言語や文化を研究した。 ○「朝鮮通信使の一行」をあらわす絵（朝鮮人來朝図） |
| 平成8年 (1996) | ○家康のとき、対馬藩の努力によって朝鮮との国交が回復した。対馬藩は、朝鮮との外交実務を担当するかわりに、貿易を行うことが許された。 ○鎖国のもとでも、東アジアの国や民族との交流は続いた。対馬藩は、朝鮮の釜山に商館を置き、木綿や朝鮮にんじん、絹などを輸入した。朝鮮からは、将軍の代がわりごとに慶賀の使節（通信使）が来る慣例となった。…このため、日本の民衆は、幕府の威光が外国にまでおよんでいると考えるようになった。 ○唐子踊りの写真（岡山県生窓町） |
| 平成14年 (2002) | ○鎖国下においても、東アジアの国や民族との交流は続きました。朝鮮とは、家康の時代に講和が結ばれ、将軍の代がわりごとに400~500人の使節（通信使）が来る慣例となりました。対馬藩は、外交の実務を担当するとともに、貿易を許され、朝鮮の釜山に商館を置き、木綿やにんじん、絹などを輸入しました。 ○絵：朝鮮通信使來朝図 |
| 平成17年 (2005) | ○家康の時代に朝鮮と講和が結ばれ、将軍の代がわりごとに400~500人の使節（通信使）が来る慣例となりました。対馬藩は、外交の実務を担当するとともに貿易を許され、朝鮮の釜山に設けられた倭館で、銀や銅などを輸出し、木綿や朝鮮にんじん、絹などを輸入しました。 ○絵：江戸城に入る朝鮮通信使一行（江戸図屏風）と通信使 |

【表2-2】【N社】

| 年 度 | 朝鮮通信使に関する叙述等 |
|-----------------|---|
| 昭和46年 (1971) | ○朝鮮とは家康のときに国交を回復し、以後将軍がかかわるごとに慶賀の使節が来た。 |
| 昭和61年 (1986) | ○家康は対馬の大名宗氏を通じて朝鮮と交渉し、朝鮮との国交を回復した。将軍家光のときから、将軍がかかわるごとに400人ほどの使節団（通信使）が来るようになった。 ○絵：朝鮮通信使の行列（朝鮮人來朝図） 新井白石は通信使を迎える礼法を簡素にした。 |
| 平成元年 (1989) | ○家康は対馬の大名宗氏を仲立ちに、朝鮮との国交回復に成功し、対馬藩は毎年貿易船を送った。家光のときから、将軍がかかわるごとに400人ほどの朝鮮の使節団（通信使）が来るようになった。 ○絵：朝鮮通信使の行列（朝鮮人來朝図） 新井白石は通信使を迎える礼法を簡素にした。 |
| 平成4年 (1992) | ○家康は対馬の大名宗氏を仲立ちに、朝鮮との国交回復に成功し、対馬藩は毎年貿易船を送った。家光のときから、将軍がかかわるごとに400人ほどの朝鮮の使節団（通信使）が来るようになった。 ○絵：朝鮮通信使の行列（朝鮮人來朝図） 新井白石は通信使を迎える礼法を簡素にした。 |
| 平成8年 (1996) | ○家康は対馬の大名宗氏を仲立ちに、朝鮮との国交回復に成功し、対馬藩は毎年貿易船を送った。家光のときから、将軍がかかわるごとに400人ほどの朝鮮の使節団（通信使）が来るようになった。 ○絵：朝鮮通信使の行列（朝鮮人來朝図） 新井白石は通信使を迎える礼法を簡素にした。 |
| 平成14年 (2002) | ○家康は対馬の大名宗氏を仲立ちに、朝鮮との国交回復に成功し、対馬藩は毎年貿易船を送った。家光のときから、将軍がかかわるごとに400人ほどの朝鮮の使節団（通信使）が来るようになった。 ○絵：朝鮮通信使來朝図（祭りに登場した仮装の朝鮮通信使） |
| 平成17年 (2005) | ○家康は対馬の大名宗氏を仲立ちに、朝鮮との国交回復に成功し、対馬藩は毎年貿易船を送った。家光のときから、将軍がかかわるごとに400人ほどの朝鮮の使節団（通信使）が来るようになった。 ○絵：朝鮮通信使來朝図（祭りに登場した仮装の朝鮮通信使） |

【表2-3】【O社】

| 年 度 | 朝鮮通信使に関する叙述等 |
|-----------------|---|
| 昭和46年 (1971) | ○なお、朝鮮は家康のときから、日本と国交を回復し、その後、将軍のかかわるごとに使節を江戸に送ってきた。 |
| 昭和55年 (1980) | ○朝鮮とのあいだは、対馬藩のなかだちによって、家康のときに国交が回復し、対馬藩は毎年貿易船を送りました。朝鮮からは、将軍のかかわるごとに使節が江戸を訪れるようになりました。 ○岡山県牛窓町の唐子踊りの写真 |
| 昭和61年 (1986) | ○朝鮮とのあいだは、対馬藩のなかだちによって、家康のときに国交が回復し、対馬藩は毎年貿易船を送りました。朝鮮からは、将軍のかかわるごとに使節が江戸を訪れるようになり両国の関係は深まりました。 ○朝鮮通信使一行の絵（1719） ○岡山県牛窓町の唐子踊りの写真 |
| 平成元年 (1989) | ○朝鮮とのあいだは、対馬藩のなかだちによって、家康のときに国交が回復し、対馬藩は毎年貿易船を送りました。朝鮮からは、将軍のかかわるごとに使節が江戸を訪れるようになり両国の関係は深まりました。 ○朝鮮通信使一行の絵（1719） ○岡山県牛窓町の唐子踊りの写真 |
| 平成8年 (1996) | ○秀吉の朝鮮侵略から後、朝鮮との国交は断絶されましたが、対馬藩のなかだちで、家康の時に国交が回復しました。その後、将軍が代わるごとに朝鮮からは通信使とよばれる使節が江戸を訪れるようになりました。また、対馬藩は、毎年、朝鮮に船を送って貿易を行いました。 ○岡山県牛窓町の唐子踊りの写真 ○淀川を上る船中の朝鮮通信使（絵） |
| 平成14年 (2002) | ○秀吉の朝鮮侵略から後、朝鮮との国交は断絶していましたが、対馬藩のなかだちで、家康の時に国交が回復しました。その後、将軍が代わるごとに、朝鮮からは通信使とよばれる使節が江戸をおとずれるようになりました。また、対馬藩は、毎年、朝鮮に船を送って貿易を行いました。 ○岡山県牛窓町の唐子踊りの写真 ○絵：雨森芳洲 ○図：朝鮮通信使の行路 ○絵：朝鮮人來朝図 |
| 平成17年 (2005) | ○秀吉の朝鮮侵略から後、朝鮮との国交は断絶していましたが、対馬藩のなかだちによって、家康の時に国交が回復しました。その後、将軍が代わるごとに、朝鮮からは通信使とよばれる使節が江戸をおとずれるようになりました。また、対馬藩は、毎年、釜山に船を送って、朝鮮との貿易を行いました。朝鮮からは生糸や木綿・朝鮮人参を輸入し、日本からは銀や銅などを輸出しました。 ○岡山県牛窓町唐子踊りの写真 ○図：朝鮮通信使の行路 ○絵：朝鮮人來朝図。 ○絵：朝鮮通信使の行列 ○絵：通信使に書を求める人 |

【表2-4】【K社】

| 年 度 | 朝鮮通信使に関する叙述等 |
|-----------------|--|
| 昭和46年 (1971) | ○朝鮮とは、家康のときに、秀吉の朝鮮出兵いらい断絶していた国交が回復し、以後は將軍のかわるたびに祝いの使節が来日した。 |
| 昭和55年 (1980) | ○豊臣秀吉の朝鮮侵略が失敗に終わったあと、徳川家康は朝鮮に使いを送って国交を開いた。日本はまもなく鎖国したが朝鮮との国交は続けられ、19世紀のはじめまで使いが往来した。幕府や藩は朝鮮からの使いをあつくもてなし、使いとの間で文化の交流を進めた。朝鮮は倭寇や豊臣秀吉の侵攻があったために、自由に貿易は認めていなかったが、日本との貿易は対馬藩（長崎県）をとおして明治維新まで続けられた。 ○岡山県牛窓町には今も当時の朝鮮の踊りが伝えられている。 |
| 昭和61年 (1986) | ○このように、外国との交際をやめ、朝鮮との国交は回復されて、対馬（長崎県）の大名宗氏を仲立ちにして朝鮮の使節が往来し、貿易も続けられた。 ○トピック学習として朝鮮通信使を扱う（1頁）。 ○鎖国体制のもとで幕府や諸藩はどのように朝鮮通信使を迎えたのだろうか？ ○朝鮮通信使の歓迎のようす。文化水準の高さ。 ○絵：朝鮮通信使の行列 ○写真：牛窓の唐子踊り |
| 平成元年 (1989) | ○このように、外国との交際をやめ、朝鮮との国交は回復されて、対馬（長崎県）の大名宗氏を仲立ちにして朝鮮の使節が往来し、貿易も続けられた。 ○トピック学習として朝鮮通信使を扱う（1頁）。 ○鎖国体制のもとで幕府や諸藩はどのように朝鮮通信使を迎えたのだろうか？ ○朝鮮通信使の歓迎のようす。文化水準の高さ。 ○絵：朝鮮通信使の行列 ○写真：牛窓の唐子踊り |
| 平成8年 (1996) | ○対馬（長崎県）は、国交の復活した朝鮮と交際する窓口であった。朝鮮の使節は幕府と交流し、日朝貿易は対馬藩の宗氏が独占した。 ○テーマ学習「朝鮮通信使の往来」として扱う（2頁）。 ○写真：津市の唐人踊り ○朝鮮との国交回復、500人の朝鮮通信使 ○絵：江戸市中を進む朝鮮通信使 |
| 平成14年 (2002) | ○朝鮮と日本は、家康のもとで国交が復活した。対馬の宗氏が、釜山に設けられた倭館に200人余りの家臣を常駐させ、貿易船を送った。朝鮮は、日本に、將軍の代がわりの際に通信使を派遣するようになった。宗氏は倭館を通じて中国や朝鮮の情報を得て、幕府に出張所を設けて、宗氏と朝鮮との国書のやりとりなどを監視した。朝鮮の通信使が江戸まで往来する長い道筋では、日本の知識人たちがその宿所をおとずれ、詩文をよみ合って交流した。 ○世界から歴史を考えよう－朝鮮通信使の往来－ ○写真：津市の唐人踊り ○朝鮮との国交回復、500人の朝鮮通信使 ○絵：江戸市中を進む朝鮮通信使 |
| 平成17年 (2005) | ○朝鮮とは、対馬の宗氏が交流の約束を結び、釜山の倭館で貿易が行われました。朝鮮は、日本の將軍の代わりに通信使を派遣し、宗氏の案内で江戸に向かい、各地でかんげいされました。通信使の宿所には、日本の知識人がおとづれて交流しました。 ○絵：江戸市中を進む朝鮮通信使 ○写真：牛窓の唐子おどり |

4. 3 2005年申請本8社の通信使に関する教科書叙述の比較

【表3-1】 2005年8社の申請本

| 社名 | 朝鮮通信使に関する叙述等 |
|----|--|
| T | <p>○家康の時代に朝鮮と講和が結ばれ、將軍の代がわりごとに400～500人の使節（通信使）が来る慣例となりました。対馬藩は、国交の実務を担当するとともに貿易を許され、朝鮮の釜山に設けられた倭館で、銀や銅などを輸出し、木綿や朝鮮にんじん、絹などを輸入しました。</p> <p>○絵：江戸城に入る朝鮮通信使一行（江戸図屏風）と通信使</p> |
| N | <p>○家康は対馬の大名宗氏を仲立ちに、朝鮮との国交回復に成功し、対馬藩は毎年貿易船を送った。家光のときから、將軍がかわるごとに400人ほどの朝鮮の使節団（通信使）が来るようになった。</p> <p>○絵：朝鮮通信使来朝図（祭りに登場した仮装の朝鮮通信使）</p> |
| O | <p>○秀吉の朝鮮侵略から後、朝鮮との国交は断絶していましたが、対馬藩のなかだちによって、家康の時に国交が回復しました。その後、將軍が代わるごとに、朝鮮からは通信使とよばれる使節が江戸をおとずれるようになりました。また、対馬藩は、毎年、釜山に船を送って、朝鮮との貿易を行いました。朝鮮からは生糸や木綿・朝鮮人参を輸入し、日本からは銀や銅などを輸出しました。</p> <p>○岡山県牛窓町唐子踊りの写真</p> <p>○図：朝鮮通信使の行路</p> <p>○絵：朝鮮人來朝図</p> <p>○絵：朝鮮通信使の行列</p> <p>○絵：通信使に書を求める人</p> <p>○絵：江戸市中を進む朝鮮通信使</p> |
| K | <p>○朝鮮とは、対馬の宗氏が交流の約束を結び、釜山の倭館で貿易が行われました。朝鮮は、日本の將軍の代わりに通信使を派遣し、宗氏の案内で江戸に向かい、各地でかんげいされました。通信使の宿所には、日本の知識人がおとずれて交流しました。</p> <p>○絵：江戸市中を進む朝鮮通信使</p> <p>○写真：牛窓の唐子おどり</p> |
| S | <p>○朝鮮との国交は家康のときに回復し、1607年以降、幕府の要請によってたびたび朝鮮使節が来日した（朝鮮通信使）。朝鮮との外交は、対馬藩主の宗氏が幕府の宗氏が幕府の意向をうけておこなった。貿易も宗氏がおこない、米・木綿・薬用人参などが輸入された。</p> <p>○絵：雨森芳洲（説明あり）</p> |
| B | <p>○豊臣秀吉の侵略とどदैえていた朝鮮とは、家康のときに国交を回復した。その交渉には対馬藩（長崎県）の宗氏があつた。宗氏は、幕府の意を受けて、朝鮮の釜山におかれた倭館で、外交・貿易を進めた。そして、將軍がかわるたびに、使節（朝鮮通信使）が江戸をおとずれた。</p> |
| t | <p>○対馬では、宗氏が朝鮮との貿易を担当し、おもに朝鮮人参が輸入されていました。宗氏は、幕府と朝鮮との国交回復の仲立ちにつとめました。そして朝鮮通信使は、2代將軍徳川秀忠のときから將軍がかわるごとに就任祝いの外交使節としておとずれ、計12回やってきました。400～500名の大使節団でやってくる朝鮮通信使のなかには、すぐれた学者・医者もあり、日本の学者や文人との文化交流がはかられました。江戸時代の各地の祭では、朝鮮通信使をまねた唐人行列が好評で、毎年のように行われました。江戸時代の人々は、その行列や唐人人形などで、外国人の姿を知ったのです。</p> <p>○図：朝鮮通信使のたどった道と足跡</p> <p>○絵：通信使に書を求める町人</p> <p>○写真：唐子踊り</p> <p>○絵：江戸の祭にあらわれた朝鮮通信使をまねた行列（浮絵朝鮮人）</p> <p>○絵：雨森芳洲</p> |
| F | <p>○幕府は、家康のとき、対馬の宗氏をとおして、秀吉の出兵で断絶していた朝鮮との国交を回復した。両国は対等の関係結び、朝鮮からは、將軍の代がわりのたびに朝鮮通信使とよばれる使節が江戸を訪れ、各地で歓迎された。また、朝鮮の釜山には宗氏の倭館が設置され、約500人の日本人が住んで、貿易や情報収集にたずさわつた。</p> <p>○絵：朝鮮通信使来朝図</p> |

4. 4 韓国・国定教科書「国史」の比較

【表3-2】【韓国国定教科書】1996年

壬辰倭乱の後、日本の徳川幕府は朝鮮の先進文化を受け入れようと、対馬島主を通じて交渉を認めるよう朝鮮に求めてきた。朝鮮は、これを受け入れ、制限された範囲内で再び通交することを許したので、両国間の国交が再開された(1609)。釜山浦に倭館が再び置かれ、ここで日本人たちは米、木綿、人参などを輸入した。それだけでなく、日本は政治的目的で朝鮮に使節を派遣することを要求してきたが、朝鮮からはこの要求に応じて十余次にわたり通信使を日本に派遣した。通信使は、その一行が一回に400名ほどで編成されたが、学者、芸術家、技術者などが含まれていた。したがって通信使は、外交使節としてだけでなく、私たちの先進文化と技術を伝えてあげる文化使節の役割もあわせてもち、日本の文化発展に大きく役立った。

【表3-3】【韓国国定教科書】2002年

倭乱後、日本は朝鮮に使臣を送って通交することを何度も要請してきた。これに朝鮮は僧侶惟政を日本に派遣して朝鮮人捕虜を連れ帰った後、再び国交を結んだ。しかし、朝鮮は日本の使臣を都に入ることを禁じ、東萊と倭館でだけ仕事をさせ、帰国させた。これに比べ、通信使は日本の江戸(東京)まで行って幕府の將軍に会うなど、活発な外交活動をくり広げた。通信使は日本の要請を受けて日本に渡り、手厚い待遇を受け、日本の文化発展に貢献した。彼らが訪れた後には、日本国内に朝鮮の文化と風俗が広まるほどであった。しかし、日本で通信使に対する反対の世論が広がり、200年あまりの間続いた通信使の派遣は19世紀はじめに幕を下ろした。

4. 5 考察

4. 5. 1 中学校歴史教科書に叙述された「朝鮮通信使」関係の用語・説明等【表1】

1971年版は、T社、N社、O社、K社に朝鮮通信使関連の叙述は見られるが、秀吉の朝鮮出兵後に国交回復が図られたことと、將軍の代替わりごとに慶賀の使節がやってきたことのみについて言及している。「朝鮮通信使」の用語の表記はない。

この段階では、江戸時代の通信使を「慶賀の使節」としている。慶賀の使節という表記では、学び手(生徒)にとっては、「將軍に就いたということ、わざわざ朝鮮から400-500人もお祝いにきたのか」ということになる。

1986年版は、T社、N社に「朝鮮通信使」という用語の表記が見られるようになった。また、朝鮮通信使関連の絵図などが掲載されるようになった。

1996年版は、調査対象の6社すべての教科書に「朝鮮通信使」の用語の表記が見られるようになった。また、朝鮮通信使関連の絵図とともに、唐子踊りなどの写真や説明などが4社の教科書に掲載されるようになった。その他、対馬藩や宗氏の役割についての叙述が見られることが1996年版の特徴である。

2005年の申請本は、「朝鮮通信使」関連の用語や絵画の掲載の有無については、ほぼ1996年版と同じであった。

以上、1971年版から2005年の申請本までの「朝鮮通信使」関連の叙述や絵画の有無等を概観したが、1971年版と1986年版の教科書に大きな変化があったことがうかがえる。つまり、1982年の教科書問題と、その前後の朝鮮通信使に関する歴史学の研究成果の積み上げが、教科書の叙述に影響を与えたものといえる。教科書問題については、1982年8月26日に、日本政府は、「歴史教科書」に関する宮沢喜一内閣官房長官談話と、同年11月24日に文部大臣が、規定を新しく追加する教科用図書検定基準の改正を行った(「近隣諸国条項」)ことで、外交的な決着を図った。

歴史学においては、植民地時代から戦後初期まで、江戸時代の「朝鮮通信使」を朝貢使ととらえる傾向があった。1970年代後半から、江戸時代の「朝鮮通信使」に関する研究が新しい視角から検討されはじめ、1980年代には、前近代の日朝関係史を善隣友好の時代とする立場からの研究発表がなされるようになった⁴⁰⁾。

こうした影響が、教科書叙述の変化や豊富な絵画資料の掲載につながったといえよう。

4. 5. 2 朝鮮通信使関連の教科書叙述の変遷から【表2-1】～【表2-4】

T社は1971年版、1980年版、1986年版まで、朝鮮通信使を「慶賀の使節」としていたが、1992年版から、「慶賀の使節（通信使）」という表記になった。2002年版と2005年版は「使節（通信使）」という表記を使用している。

N社は、1971年版は「慶賀の使節」という表記であったが、1986年版からは「使節団（通信使）」という表記に変わった。

O社は、1971年版、1980年版、1986年版、1989年版までは「使節」という表記であったが、1996年版からは「通信使とよばれる使節」という表記に変わった。

K社は、1971年版は「祝いの使節」、1980年は「使い」という表記であった。1986年になると、「朝鮮の使節」という表記とともに、トピック学習の欄において「朝鮮通信使」という表記が見られるようになった。2002年版、2005年版では「通信使」、「朝鮮通信使」という表記になった。

以上、4社の「通信使」関連の記述については、1980年代が一つの節目となっている。つまり、「慶賀使」や「將軍の代替わりを祝う」という表記であれば、読み手（学び手）にとっては、日本の江戸幕府に従属的な通信使の姿が描かれてしまう。まさに歴史学と歴史教育の日韓対話の成果が徐々に教科書叙述に影響を与えてきた例といえよう。

4. 5. 3 日本8社の申請本【表3-1】

8社の申請本とも、「通信使」、または「朝鮮通信使」という表記を使い、通信使の説明を丁寧に行っている。また、対馬藩（宗氏）の役割と釜山の倭館の役割が叙述され、倭館での貿易の様子を詳細に叙述した教科書も数社あった。

8社とも朝鮮通信使の叙述内容については、ほぼ横並び状態になったといえる。

4. 5. 4 韓国「国史」1996年版と2002年版の比較【表3-2】【表3-3】

1996年版には、「私たちの先進文化と技術を伝えてあげる文化使節の役割もあわせてもち」という叙述がある。2002年には「朝鮮は日本の使臣を都に入ることを禁じ、東萊と倭館でだけ仕事をさせ、帰国させた。これに比べ、通信使は日本の江戸（東京）まで行って幕府の將軍に会うなど、活発な外交活動をくり広げた」という叙述がある。

いずれも歴史的事実ではあるが、学び手（生徒）にとっては、いずれも施惠的、あるいは優越的な朝鮮通信使の姿を描き出している。つまり、朝鮮通信使が日本から観察し、学んできたこと、取り入れた文物の叙述が欠如しているのである。

日韓の相互理解のための教科書叙述を求めるとすれば、日本からさつまいもやたばこの栽培などが伝来したことの叙述と釜山の倭館における交易についても、「日本からは銀や銅を輸入した」などの叙述があることが望ましい。

1996年版は朝鮮通信使の始まりについての叙述はある。しかし、その後の日本との関係につ

いては、1975年の雲揚号事件（江華島事件）まで目立ったものはない。すなわち、日韓関係史については、通信使から雲揚号事件（江華島事件）まで、教科書に叙述するような大きな動きがないとしているのである。ここからは、前近代から近代にかけての通信使外交の終焉と日韓の政府間の摩擦等を読み取ることは困難である。

2002年版では、「しかし、日本で通信使に対する反対の世論が広がり、200年あまりの間続いた通信使の派遣は19世紀はじめに幕を下ろした」と、朝鮮通信使の終焉についての叙述が加わり、学び手（生徒）にとって、善隣友好の関係が崩れていく経過を学ぶきっかけができたといえる。日本の教科書にも、朝鮮通信使の終焉についての叙述を加筆することを望みたい。

4. 5. 5 日本8社の申請本と韓国「国史」2002年版【表3-1】【表3-3】

日本8社と韓国「国史」の違いは次の2点に集約できる。

1点目は、日本側の教科書は、朝鮮通信使と釜山（倭館）を通じての交流と交易について、いわゆる双方向の交流として叙述されている。しかし、韓国「国史」では、釜山（倭館）での交易は極めて限定的であったことや、朝鮮通信使が一方的に先進的な文化を伝えてきたという施恵的な存在として描かれていることである。

2点目は、朝鮮通信使の終焉と近代との関係である。日本の教科書からは、通信使から江華島事件の関係（歴史的経緯）についてはほとんど読み取ることはできない。学び手（生徒）の立場からは、「江戸時代は朝鮮通信使が来日した友好の時代」、「明治政府は、国を閉ざしていた朝鮮に対して、開国を迫り江華島事件をひきおこした」と一面的な歴史認識に陥ってしまう可能性がある。

たとえば、「朝鮮通信使に対する反対の世論とは何か」、「なぜそのような世論が形成されたのか」、「明治時代、なぜ朝鮮側が明治政府の開国要求を拒んだのか」など、「近世」から「近代」への時代区分の意味と世界史的背景を的確にきちんと踏まえた学習活動を構想することが求められる。

学び手（生徒）の興味・関心、問題意識を大切にしながら、江戸時代の朝鮮通信使から、近代の江華島事件までの経緯を学ぶことができる教材の開発が急務である。

V. 研究のまとめ

坂井俊樹（2005）は、各国の歴史教育が一定の自国ナショナリズムの形成を目的とするとしながらも、「他者の視点を欠いたとき、そこに様々な問題が派生する。歴史認識の内にある無意識的な「侵略性」こそ問題¹⁰」と指摘する。

近代の一時期（1910-1945年）、日韓は歴史を共有した。こうした歴史的意味からも、日韓の歴史問題に関する対話では、最初に日本側が「他者」の視点をつことが求められる。そうすることによって、日韓の歴史問題の対話がより実りあるものになると共に、日韓双方の歴史教育のベクトルが、内向きの偏狭なナショナリズムに向かう方向から、より開かれた方向に向く考える。そうした意味で、歴史学の研究成果と学び手（生徒）の発達段階、国家の教育政策を統合したうえで、作成された歴史教科書を他者の視点を持ちながら比較検討することは、日韓の相互理解の視座からは重要な営みであるといえる。

一方で、教科書叙述中心の研究には、限界があることも認識すべきである。

大きな問題は、教育課程における歴史教育の位置付けである。日本の中学校歴史教育は、社会科教育の中の歴史的分野として行われている。世界の動向については、日本列島史とのかかわりの中で、教科書叙述に反映されている。韓国「国史」は、社会科教育から独立した韓国史として扱われ、世界の動向については、韓国史にかかわるもののみ叙述されている。必然的に、韓国「国史」については、韓国史に密接に関連のある対外関係史、すなわち日本に関する教科書叙述が多くなるのである。

このような歴史教育の教育課程上の違いとマスコミやインターネットの発達、日韓の政治・外交的な立場を考えた場合、歴史教科書叙述のみに圧縮された日韓の対話から、メディア論や教育の内容や方法、授業評価等の広領域的かつ複合的な研究の対話が求められる時代に入ったと考える。

注・参考文献等

- (1) 当時、来日した李元淳は「日本史教科書にみられる韓国史関係記述について」と題して講演を行い、日本側の歴史研究及び教科書の内容検討への問題提起を行った。
加藤自身は1976年に韓国に招かれ、「民族と歴史・歴史教育」をテーマとする大会で、「日本の歴史教育における韓国史」と題する報告を行った。
その後、1977年「歴史教育と韓日古代史」をテーマとする大会がソウルで開催され、筑波大学グループを中心に10名のメンバーが招かれ討論を行った。1980年には筑波国際シンポジウム「日本人と国際化」が開かれ、李元淳が「日本文化は外国でどう見られているか」と題しての報告を行った。
- (2) 加藤章「日韓歴史教育交流のなかで」『教科書を日韓協力で考える』大月書店、1993、pp.20-39
- (3) 金漢宗「韓国における国史教科書の変遷とイデオロギー」『社会科教育研究』No.77、日本社会科教育学会、1997、p. 6
- (4) 谷川彰英『日韓交流授業と社会科教育』明石書店、2005、p.21
- (5) 三宅英利「通信使」『国史大事典第9巻』吉川弘文館、1988、pp.706-707
- (6) 李進熙『江戸時代の朝鮮通信使』講談社、1992、pp.25-33
- (7) 仲尾宏『朝鮮通信使と江戸幕府』明石書店、1997、pp.254-257
- (8) 「牛窓の唐子踊り」については、一般的に江戸時代の通信使が伝えたものといわれているが、李元植氏は、次の異論を展開している（李元植『朝鮮通信使の研究』思文閣出版、1997）。
「牛窓で、今日なお民俗芸能の一つとして伝わる「唐子踊り」について、朝鮮通信使の小童対舞から学んだものとしている人が多いが、筆者はむしろ琉球使節の楽童とのかかわりが深いのではないかと指摘した。その根拠は「唐子踊り」の歌詞が琉球使節が奏でる「沙窓外」の曲詞に似ている点からである。牛窓港には通信使と同じく、琉球使節も来泊したのである」。
- (9) 釜田聡、「日韓の歴史教科書の比較検討－江戸時代の『通信使』を中心に－」『上越社会研究』、第15号、上越教育大学社会科教育学会、2001、pp.73-82
- (10) 上田正明『朝鮮通信使 善隣と友好のみより』明石書店、1995、p. 8
- (11) 坂井俊樹「日韓の歴史教育、何が課題か？」『歴史地理教育』No.691、歴史教育者協議会、2005、p.18

Comparing and examining the depictions found in middle school history textbook from Japan and Korea

—Focusing on depictions from the textbook about Korea's official diplomatic delegation to Japan during the Chosun Dynasty —

Satoshi KAMADA

ABSTRACT

The purpose of this study is compare and investigate the changes found within history textbooks, ranging from the problems found in 1982 version to newly petitioned text in 2005, in order to clarify the changes and problems of depictions found in them by centering on the history of Korea's official delegation to Japan during the Edo period.

Upon comparing and examining the recent Japan/Korea depictions in history textbook and changes in depiction found in Japanese history textbook with the attention given to Chosun's delegation to Edo period Japan, results from the historical research and conversations of historical history education of Japan/Korea have slowly given influences to depictions found in textbook from both countries. Also, the acknowledgement has been made that developing a teaching material for all students can understand is the prime task to be done, on the historical circumstances from Korean delegation to Edo-era Japan to the Kanghwa incident.